

帝國キネマ時代映畫 第百八十二號

紹介 一脈の新味ある好き譚りではあるが作者が餘りに劇的効果に無關心なりし爲め作が狙つた然烈な戀の哀史も慮げられる弱者の叫びも更に觀客に通せず、只あつけない譚りに化して居るのほ残念である。前半は兎に角後半に至つては商賣氣のない事夥しい。帝キネマが封切しなかつたのも、今封切するに及んで文藝映畫の名を冠するも無理からぬ事であると思はしめた。然し監督方面には可成り好い所が多くあつた。殊に前半に於る八郎とお露の戀の描寫など簡單ではあるが充分効果はあつたと思ふ。後半は大分カットされたのではないかと思ふ。後半は大事の出来ない場面や矛盾な個所が少くなつた。松枝鶴子嬢のお露は性格から云つたら持つて來いの嵌り役であるが大して作者が働かせないの損をして居る。尾上紋十郎氏の松永は御役目御苦勞である。——山本 綠葉——

興行價値——觀客は全く想像を裏切られ、そしてその結末のあつけなさに必ず不満を抱かう

されば興行價値は極めて薄い。(二月廿六日、大阿芦邊劇場封切)